

---

# チヒロ

ico

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

チヒロ

### 【Nコード】

N3779D

### 【作者名】

ico

### 【あらすじ】

恋人との突然の別れの中、1ヶ月という期間で移り変わるチヒロの心。どうして別れはこんなにも悲しいのだろうか。

どうしてこんなに悲しいのだろう。チヒロは止まらない涙をこらえることもせず、瞳から頬へと無限に溢れてくる雫をただ受け入れていた。このまま泣いていればいつか答えがわかるかもしれないと思ったのだ。どうしてこんなに別れは悲しいのだろうか。

1ヶ月前、チヒロは3年間付き合っていた恋人のケイタと別れた。学生時代の最後のほうに付き合い始めたので、チヒロは社会に出たら終わってしまうだろうとなんとなく思っていた。しかし新しい環境ですれ違うこともあったが、この3年というものの予想外に順調で、チヒロは幸せに過ごしてきたのだった。

それはチヒロが思い描いてきた恋人との過ごし方を完璧にクリアした3年だった。ケイタはどんなに疲れていても恋人への連絡はかきさなかったし、1年に何回かある行事もかかさず2人で過ごした。クリスマスになれば恋人達のために用意されたイルミネーションを見に行き、ここぞとばかりに用意された豪華なディナーを食べ、間接照明が灯ったため息がでるような素敵なホテルの部屋の中2人で眠った。ケイタは誕生日には必ずサプライズを用意してチヒロを喜ばしてくれたし、毎年花火には浴衣をお揃いで着たりと、チヒロは申し分ない3年を過ごしてきたのだ。

しかし1ヶ月前、ケイタは突然連絡を絶った。チヒロがいくら電話をしてもメールをしても全く返事がない。チヒロとケイタは毎週決まって土曜日の12時に待ち合わせをしていたのだが、その時間にいつもの待ち合わせ場所でいくら待ってもケイタは来なかった。

それでもチヒロは毎日電話をし、毎週土曜の12時にいつもの場所に行った。来るかどうか分からない人を待つことは、こんなにも辛いものだったのか。

不安と心配でいっぱいになりながらも、チヒロは泣かなかった。チヒロのプライドが突然こんな風に連絡を絶ったケイタを許せないからだろう。

毎日毎日出ない電話、返ってこないメールを繰り返してそろそろチヒロの不安が限界に達した3週間目の土曜日。いつもの場所でまたケイタを待つていたチヒロは、目の前を通り過ぎて行く人達にピントを合わせることを止めた。それまではどこかにケイタがいないかとまばたきするのも惜しんでいたのだが、もうゆっくり待つことにしたのだ。

「そうだ・・・」チヒロはケイタに唯一不満を持っていたことを思い出していた。ケイタはいつも遅刻してきた。待ちぼうけてぼうっとしているチヒロの頭を突然優しく叩くケイタ。そしてニコニコしながら謝って・・・そんなことを考えていたらチヒロはだんだん悲しくなってきた。今までの不安や心配が全部悲しみに変わってチヒロを染めていった。

今までケイタからの連絡が途絶えることなんてただの1度もなかった。以前たったの1日連絡が取れなかった日があったのだが、次の日の昼にケイタのお母さんが病院から連絡をくれた。どうやら前日の夜にバイクに乗っていて車と事故を起こしたらしい。大怪我をしたが意識が戻り、チヒロに連絡をしてほしいと頼まれたのだそうだ。それ以来ケイタは自分の身に何か起こったらチヒロに連絡をいれるよう両親に言っている。つまり今連絡がないのは、連絡が「とれない」のではなく「とらない」のだ。ケイタは自分の意志で連絡することをやめている。

チヒロは今までの1つ1つの思い出に触れる度に今の状況を苦しまずにはいられなかった。1度捕まった悲しみから逃れられずチヒロは人が溢れかえる街の中、来ない恋人を待ちながら初めて1人で泣いた。

次の日の日曜から、チヒロは溢れ出る涙と格闘するようになった。こらえようとすればするほど胸は苦しくなるのだが、このまま泣き続けるなんてチヒロには考えられないことだった。今までケイタからの連絡を待ちわびたことなんてなかった。チヒロは愛されていることを楽しみ、満たされ、安心していた。やがてそれは自信とプライドとなって、ケイタの連絡を待ちわびて不安と悲しみで涙を流すことに抵抗を感じてしまうのだった。

しばらくすると涙の波は治まったのだが、夜にはまた大きな波となってチヒロを襲った。日に日にこの波がやってくる回数は増えていき、チヒロはだんだんと抵抗できなくなっていった。

そして今日、チヒロはとうとう抑えようのない涙を全て受け入れたのだった。もうほとんど何も手につかない、チヒロは捨てられた猫の様な気分だった。どうしてこんなに悲しいのだろう。

涙はチヒロの瞳から溢れ、頬をつたいポロポロとこぼれていく。

重力のまま下へ下へこぼれていく。ケイタと連絡がとれなくなって1ヶ月。もう2人は別れてしまったのだろうか。

「3年という時間の終わりがまさかこんな風に来るなんて思いもしなかった。私はずっと愛されていたしこの恋で思い悩むことなんてなかったのに。」

チヒロはどこまでも悲しくなった。

「別れは突然だ、私が今こんなに悲しいのはこんな別れ方だったからかもしれない。夢中という訳でもなかったが3年も付き合ってきたのだ、それを話もせず顔も見ずに終わりにしろというほうが無理なのだ。」

チヒロはそう思い自分勝手な別れを選んだケイタに怒りを覚えたが、それもすぐに悲しみにのまれて消えた。涙は止まらない。どうして別れはこんなに悲しいのだろう。

チヒロはケイタの様々な顔を思いだしていた。怒った顔も笑った顔もあまり見たことがなかったが泣いている顔も全て鮮明に思い出せる。そして口ぐせも思い出す、「チヒロはどうしたい？」

「そうだ、いつもケイタは私の希望を聞いてくれていた。私の考えや理想をいつだって彼は知っていた。・私？ケイタが何をしていたのか知らない。聞いたことない。」

涙は止まらない。だけどチヒロはようやくわかった、別れることがどうして悲しいのか。別れるということは何もしてもらえなくなる、そして何もしてあげられなくなるということ。ケイタはもうチヒロに何もしてくれない。そしてチヒロはケイタに何もしてあげられないのだ。

今までの当たり前を捨てて、チヒロはただケイタを愛したいと思った。

「愛することは、きっと相手のために何かをするということなのだ。ケイタがそうやって私に愛を与え続けてきてくれたように。だけど私はそれに気付いてもケイタが何をしたかったのか、何を望んでいたのか全くわからない。」

ただ受け入れるしかない別れはこんなにも悲しいものなのか。チヒロは無限に生まれてくる涙をただ見つめていた。

（後書き）

初めての投稿です。いろいろとご意見頂けたら嬉しいです。チヒロをよろしくお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3779d/>

---

チヒロ

2010年12月7日14時15分発行